

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

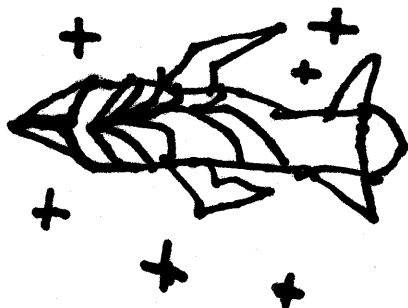


2002年11月号



幼児の教育

第101巻 第11号



幼児の教育 目次

—第一〇一卷 第十二号—

© 2002
日本幼稚園協会

巻頭言 子どもの力……………吉村真理子…(4)

特集へとまる・とどまる〈

「とまる」ことからはじまる……………高橋 和子…(8)

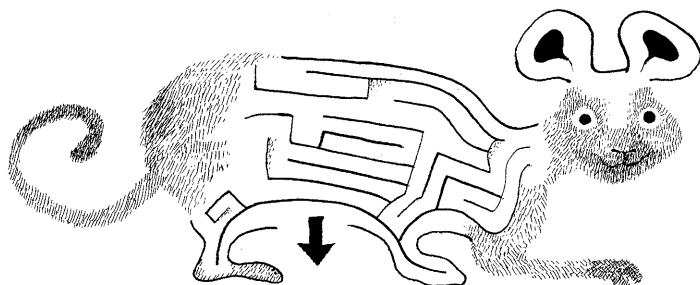
漢字と日本語……………渡辺 純一…(12)

とどまれなかった私……………田中三保子…(16)

頭の中にとどめていたこと……………近藤 和雄…(21)

障碍をもつ幼児の保育(4)―この子と出会ったとき―

歩くということ その四……………津守 真・津守 房江…(25)



生きものの共存の畝間から(7)

有機物が土に還る・堆肥づくり……………徳野 雅仁…(34)

遊びを通して子どもの育ちを考える(4)

「病院ごっこ」と「ゴム鉄砲」……………阿部 康子…(36)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(3)ブルデュー社会学におけるハビトゥス概念……………安田 尚…(46)

外遊びの楽しみ―幼いきょうだいと暮らす―……………藤津 麻里…(58)

表紙絵／佐々木麻こ

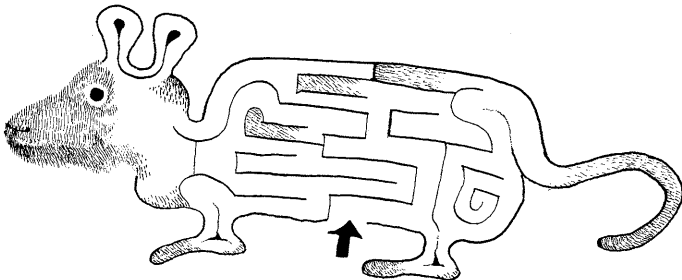
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子





巻頭言

子どもの力

吉村 真理子

弱さの力

筆者のいた松山東雲短大では授業に卒業生に参加してもらうことがよくありました。特に「乳児保育」の授業では母親になった卒業生に母子で登場してもらうと、乳児の発達特徴を学ぶだけではわからない生きた乳児の実像による感動が教室中に広がっていくのがわかります。筆者はもう退職しているのですが後任の先生が次のような話をしてくれました。

先週の授業にMさん親子にきてもらった後の学生の感想文にこんなのがあったのですよ。「教室にお母さんに抱かれてSちゃんが入ってきた途端、思わず笑顔になっている自



分を発見して驚いた。このところ成績のことや友人との悩みを抱えて落ち込んでいたのできつと暗い表情をしていたと思うのに、心の底からわき上がってくる自然な笑顔はどうしてなのか。その快さにひたりながらそつと周りを観察してみた。するとみんなの顔が笑っている。おもしろいから、滑稽だから笑うのと違って満ち足りた幸せそうな笑顔がそこにあった。ただそこにいるだけなのにみんなをこんな気持ちにさせてくれるあかちゃん不思議な力に感動した。もう一つは、お母さんが子育ての苦労を『大変だ』と話しながらも子どもを見る目やしぐさの優しさが心に残った。母親や他人の私たちまでこんな気持ちにさせてくれる、子どもが生まれながらに備えている力とは何なのだろうか、なかなかいい視点だと思いませんか、と。

その話を聞きながら筆者が数年前骨折をした後、駅や乗り物の中で見知らぬ人々から親切にもらったことを思い出しました。自分が思うように動けない状態にいると周りの人が手を貸そうとしてくれます。その気持ちを引き出しているのは私の能力ではなく無力さのゆえです。そこには自分たちにとつては何の役にたたなくても弱者の存在を認め大切にする人間性を感じて頼もしく思いました。同じ弱者といっても乳児の場合もつと能動的で、生きていくためのありとあらゆる世話を要求し、ところかまわず泣きわめき暴君ぶりを発揮しています。子どもは未来という希望を担っているゆえに生きる権利要求の見



事さに大人は無条件に感動させられるのでしょうか。保育の基本は大人の心に呼びかける子どもの力ではないのでしょうか。大人はそれに応えずにはいられません。

未来を夢見る力

絵本『いつかはきつと』（シャールロット・ゾロトフ作、ほるぶ出版）には、ある女の子が「早くこんなふうになったらいいな、いつかはきつとこうなるにちがいない」と身近な夢を描いて楽しむ様子がほえましく描かれています。例えば、バレエのおけいこに行く先生がみんなに「エレンをごらん、あの上なこと」とほめてくださるの。うんとお金持ちになったら知ってる人みんなにプレゼントをして、お礼を言われても「どういたしまして、それぼっち」とつつましく答えるの。ひとりでさっさと寝に行つて、パパとママに「もう寝るの？ 今日はやけにおりこうさんね」と言わせてあげる、などなど。しかし、現実には、エレンはいつもバレエのレッスンで先生に注意されてばかりいるのでしょうか、友だちにプレゼントを買うだけのおこづかいを持っていません。おそらく毎晩「いつまでテレビを見るの、早く寝なさい」と言われ続けているに違いありません。でもこれはエレンのささやかな到達目標とも言えるでしょう。

子どもたちは途方もない大きな夢とともにもう少ししたらできるかもしれないという実現可能な夢を抱いて生きています。それが成長願望であり子どもの人生を楽しくする原動



力になっています。

佐伯胖氏によると、人間の生き方の目標として「子どもらしくなる」ことを「円熟」と、呼び、保育（幼児教育）というのは、そのような「円熟」を文化として大切にし、私たちの「生き方」として、すべての人々に「子どもらしさ」のすばらしさ、大切さを訴える文化的実践である、と述べておられます。

ここで取り上げた「子どもらしさ」とは、能力のゆえではなく無力ながら存在そのものがもっている未来への希望を抱いて生きる姿勢を指していると思われまます。自分のまわりを新鮮な目で眺め、喜びを感じ希望を持つ心は大人になったからといって捨てる必要はありません。C・S・ルイスは児童文学を書く極意をたずねられたときに「私は子どものときはオレンジジュースがとて好きだった。現在はワインが好きですが今でもオレンジジュースは喜んで飲みますよ」と語ったと言われます。つまり子ども時代の喜びを大人になっても変わらず持ち続けていることが大切ということでしょう。

現代社会の数々の問題を抱えて忙しい保育者が目指す円熟とは、子どもの可能性だけでなく自分自身の限らない可能性を信じ夢見ること、つまり、子ども時代の喜びをそのまま心によみがえらせることではないのでしょうか。そのためには毎日出会う子どもたちの中に「子どもらしさ」を見つけて共感することで、私たちも少しずつ「子どもらしくなる」文化的実践に近づけるのではないのでしょうか。

（元松山東雲短期大学）

特集へとまる・とどまるく

「とまる」「ことからはじまる」

―やがて「とどまる」「ことから世界認識が広がる―

高橋 和子

軽快なピアノの旋律がとまる

歓声と猛スピードの走りがとまる

一瞬の静寂がホールをつつむ

子どもたちの顔は次の瞬間を待っている

ピアノの音に耳をそばだてている

こぶしを握りしめ肘を曲げて待っている

ピアノがなった 一転して走る 走る

子どもは「走ってとまる」「運動が好きだ

音と一緒になぜか大きな声を出して走る

転んで泣きべそをかいてもまた走る

円心からだをあげてカーブを走る

楽しそうに夢中に顔をしかめて走る

風を切って蝶のようにかろやかに走る

なるほど「人間は動物だった」のだ

子どもは「走ってとまる」運動を毎日繰り返しても飽きない。「走る」だけなら駄目かもしれないが、「とまる」ことと一緒に進むとおもしろさも倍増するらしい。単調な動きであるのだが動と静との変化に子どもは興味を覚える。とまれば休息にもなる。エネルギーを蓄える。そして「動く」へ備える。子どものからだのリズムは楽しさを繰り返すために、まったく自然に働くものなのだ。

バージョンアップすれば、さらに喜々として戯れる。「ピアノがとまったら、からだのどこかを床につけてとまろう」という遊びがある。指示は「胸・肩・背中・おしり・おでこ・ほっぺた・右の耳・左の膝」などの簡単な身体部位であったり、「踵・土踏まず・うなじ」などのむずかしい呼び名も混じる。見よう見まねも手伝って「おとがいがどこなのかもひとりでもわかってくる。このとき、これが「生きた言語学習の鉄則だ」と実感させられる。われさきに競うので、ときに子どもは間違う。左右の

区別がつかなかったり、指示をちゃんと聞いていなかったりしてのことだが、これもいつのまにか修正してしまう。

この遊びは身体部位と身体意識を全身運動でつなげる学習であるが、人の話は集中して聞くべきであるという「生きる力」の基本形をからだで覚えさせてくれる。さらにひとひねりすれば、子どもの世界認識が格段に広がる。「床に耳をつけたらどんな音がする？」と聞くと、子どもは「モグラの鳴き声」が聞こえるなどと答えたりする。子どもの発想の豊かさに驚かされる。「床は冷たい・ザラザラする」といった気づきを促すこともできる。「床ではなくて、お友だちとからだをくっつけてみようね」と言えば、人とかかわりも無理なく生まれてくる。床や人や草木の感触の違いや、どのくらい力の加減で自分のからだをくっつけたらいいのかも、ひとりでに覚える。ここに、遊び「走ってとまる」の意味と学びがある。

それでは、「こんどは、いろいろなポーズをとって、とまれるかな」と趣向を変えてみよう。走っている途中のままどとまったり、片足をあげたり、ブリッジしたりする。イギリスやアメリカではこのような運動教育が幼少期に活発に行われており、運動学習の基礎を担っている。日本の子どもにもさまざまなからだの使い方を覚えてほしい。その事始めが「走ったり」「どまったり」することだと、私は考えている。猛スピードの走りを急にとめるのには相当な筋力とからだの操作が必要になる。音を立てずにそつとどまったり、膝や足首や爪先をうまく使うとき、どうなるか。いろいろな言葉を覚えるように、運動の両極「走る・とまる」を肌身で経験することによって、からだの動きの幅と意味とが広がるのである。

そうこうしているうちに、蛙や兎やお化けになりきって、夢中で変身世界に遊ぶ子どももでてくる。子どもは怖いもの見たさをとくに好む。一つ目小僧

やのつぺらぼうに、表情豊かに声まで添えて変身する。私を怖がらせようと、ポーズのみでは物足らず、すごい形相をして追いかけてきたりもする。

「コワイコワイ」とでも言おうものならば、ボルトージがあがって、ロボットや熊に変身している子どもまでも加わり、その場はお化け屋敷に一変してしまう。辞書を覗けば「とまる」の語義に「ある態度をとる」ためとあつて、原因説にも触れている。

そのとおりであつて、このように自分で工夫しだす態度が芽生えてくると、子どもたちは、きまつて「見て！ 見て！」を連発する。

「ボクこれができるよ、わたしのはこうよ」と、むずかしいポーズへの挑戦も始まる。「とまる」が工夫を促す。度重なるうちに子どもが世界と出合う「いま・ここ」に「どまる」時間ものびてくる。

そうなれば工夫が醸成されてきて、ときおり驚嘆するばかりの表現を見せてくれたりする。この際、「とまる」と「どまる」ことは、子どもが「ひ

と・もの・こと」とのかかわりを体感するための必須条件と言わねばならない。

ちなみに「とどまる」の第一義は「同じ場所にあって動かない」ことなのだが、この「動かない」には世界を認識する契機という重大な含意がある。

「アヤちゃんの素敵だね、みんなで真似しようか」と誘ってみれば、子どもたちはお義理で一度はやってみてくれるものの、すぐさま自分の工夫に戻って熱中する。熱中こそは子どもが自分の世界に「とどまる」ことの証左にはかならない。そして工夫を他者に見てほしくてアピールする。これこそが、世界認識の広がりなのである。

「見て！」としきりにせがむ子どもの声は、達成目標が明確なときではなく、オープンエンドのうちに聞こえてくる。そのときの私は、子どもの一挙一動に注目して、少しでも良いところを褒めようと努めている。先を急がずそこにとどまって、子どもの「いま・ここ」に寄り添っているのである。子ども

は敏感だから雰囲気や即座に察知する。そして自由奔放に振る舞いたがる。こうしてみると、問題には、私たち指導者がその場にどのように立ち合うのかに、つまり「とどまる」のみに、左右されることになるのではないか。

ことほどさように「走ってとまる」運動や「とどまる」ことの中には、「身体操作・身体意識・集中心力・かかわり・変身・工夫・発見」などの要素が潤沢に含まれている。一瞥しただけでは、「とどまる」も「とどまる」もネガティブな意味を響かせるのだが、読み砕いてみればこんなに素敵な言葉はないと



▲「とまる」、そして、人とつながる

思えてくる。ところで、子どものこのような素直な世界認識行動がなぜなのか、いつのまにか失われてしまう。近年では小学校高学年でその兆候が現れたりするのだが、私は困惑を禁じえない。これは、二

十年余りを子どもとともに表現運動を遊んできての切実な実感である。

(横浜国立大学)

漢字と日本語

渡辺 純一

最近の受験ガイドブックのなかには、漢字の書き取りの勉強はするな、と指導するものがあるそうです。努力の割に配点が低いので効率が悪いと言うのです。たしかに大学入試という目的の前には、効率が重要でしょう。しかし、人生、いつもゴールが決

まっているわけではありません。目標を見つけることの方がもっと大切かも知れません。ガイドブックの著者が最難関の医学部に合格しながら、もっぱら受験指導に力を入れているのは、手段と目的を取り違えたとは言えないでしょうか？

小学校で、国語の勉強と言えば漢字の書き取りというくらい、漢字の習得は生徒にとって負担の大きなものです。明治時代以降、我が国が欧米の文物文化の輸入に必死になっていたとき、漢字を使わないかなもじ主義や、ローマ字会などが提唱されたことがありました。漢字学習の負担を軽くして西欧の文明をより効率的に取り入れようという考えでした。しかし、今日、我が国ではこのような意見はすつかりすたれてしまいました。

さて、とまると、とどまるを辞書で引いてみると、意外なことに漢字表記はほとんど同一です。泊まる以外の、止まるも、留まるも、停まるも、とまると、とどまるの両方の読み方と意味を持っています。

とまる、止まる、留まる、停まる、泊まる
とどまる、止まる、留まる、停まる

ですから、漢字で書かれた文を読む場合、「とまる」のか「とどまる」のかは、文脈から自分で判断しなければなりません。これらは、同一表記に複数の音と意味が対応する例ですが、反対に、同じ音に複数の意味と表記が対応するのが同音異義語です。

同音異義語の多さこそは、日本語がかかえる大きな問題です。快晴、改正、改姓…。かいせいには十三種類。きせいでは、寄生、規制、規正、帰省、既成…十九種類もの同音異義語があります。漢字なしではとても区別がつきません。我が国が漢字まじりかな表記を使用し続けているのも、同音異義語の数の多さが主な理由となっています。

音と意味と表記は、言語の三要素です。それぞれが一对一に対応すればよいのですが、必ずしもそうならない場合、いびつな三角関係が生じてしまいます。万葉集の時代から、我が国は、中国から漢字を取り入れて使ってきました。複雑な発音体系を有する中国語からはるかに発音の単純な日本語に多数の

言葉が輸入されたわけですから、同音異義語が多数生じたのはやむを得ないことでした。

ところで、最近のワープロは、音入力、表記出力という意味で画期的な発明だと考えられます。音と意味と表記の三要素をパソコンで自由に変換するのですから。問題の同音異義語は、意味で選択するようになっていきます。選択に迷っているとそれぞれの単語の意味の説明が表示されるようになってくるものすら登場しています。ワープロによって漢字の使用は容易になり、漢字廃止論は全滅しました。これに対し英語のワープロ・タイプライターは、表記入力、表記出力ですから、真のワープロとは言えません。綴り字の間違いを指摘するのが精一杯です。

最近、中国の上海と韓国のソウルを旅行する機会がありました。初めて見る上海の高層ビルが建ち並び発展ぶりには、これが本当の社会主義国なのかと目を見張りました。この国が、二〇〇八年の北京オリンピックと二〇一〇年の上海万国博覧会を同時に

準備中だと聞いて、底知れぬ潜在力を実感するとともに近未来の躍進を予感させられました。中国旅行でありがたいのは、漢字でおおよその見当がつくことです。人民公園二元とあれば入場料二元と分かりますし、下町の露店には、「焼肉 1串 1元」と出ているので、一元コイン（約十五円）を差し出すと、一串渡してくれます。しばらく行くと「1串 1.5元」となっているのでよく見ると「羊肉」と値段が高い訳が分かります。漢字のおかげで実に居心地よく過ごせました。

ところが、二十年ぶりに訪れた韓国は、すっかり様変わりしていました。町中にハングル（韓国文字）があふれていて、漢字はほとんど見かけません。新聞を見ても、漢字はほんの数文字でちんぷんかんぷんです。以前には、漢字だけで内容が大体わかったものです。当時、漢字を徹底的に排除したのは北朝鮮で、それだけに韓国は漢字の使用にこだわっているようでした。それがこの変貌ぶりです。

顔形が変わらないだけに、自分ひとりが迷子になつたような疎外感にさいなまれました。

五個の母音と十四個の子音しかもない日本語と比較して、韓国語には母音が二十一個、子音が十九個もあるので、音声体系は日本語よりはるかに複雑で、同音異義語の数も比較的少数です。大概は文脈から見当がつかますが、それでも、区別が困難な場合には、英語の単語に置き換えるのだそうです。

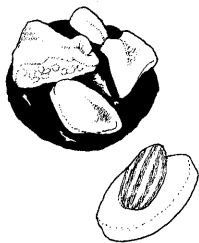
ところで、韓国でも、現在は学校教育の過程で一八〇〇個の漢字を教えています。新聞は、シンムン、地下鉄はチハチョル。韓国語には漢語由来の言葉がたくさん使われています。それで、漢字をほとんど使わなくなった今日でも、言葉の元にある漢字を覚え言葉の成り立ちを理解することが重要だと考えられているのです。

しかし、現実には、若い人の漢字力は低下する一方です。ソウル大学の年輩の教授が嘆くのは、「彼らは、英語の論文は読めても、私が二十年前に書いた

韓国語の論文が読めないんだよ」。論文のなかの専門用語が漢字になっていたのでそれが読めないために理解できないのです。いくら学校で漢字を教えても、実生活では使わないのですから、漢字ばなれは進む一方でしょう。おとなりの韓国でいつまで、漢字教育が続けられるのか、人ごとながら心配に感じました。

つぎに、その先生がベトナムを訪問した際の話になりました。ベトナム語の大学はダイホック、学生は、ホックシン。発音を聞くと理解可能で痛快。韓国の学生よりよほどましだと言わんばかりでした。しかし、ベトナムでは、数十年前に漢字を廃止し、今日ではローマ字を使用しています。

日本、韓国、ベトナムと、本家の中国は、漢字の使用に関する限り、それぞれ異なる道を歩み始めました。



今、言葉を覚えている子どもたちが壮年に達する二十一世紀後半、これらの国々は、どうなっているのでしょうか？ 漢字による筆談は、パソコンの自動翻訳に置き換わっているかも知れません。

話し言葉は、生まれてから十二歳までにほぼすべてが決まってしまうと言われています。読み書き

も、七歳から十五歳でほとんど完成します。母国語を覚える機会は人生に一度しかありません。そのことを思うと、子どもたちの柔軟な頭脳に日々吸収されていく母国語が、正確で豊かで美しいものでありつづけることを切に願わざるをえません。

(東京大学医科学研究所)

とどまれなかった私

田中三保子

「とどまる」ということばから私が最初に思い浮かべたのは、私が「とどまることができなかった」と実感した保育体験である。私はE子に閉じこめられ

た。その体験も含めて、私はE子とのかかわりを「子どもが自分で乗り越えるとき」としてすでに書いたのであるが(本誌第九十一卷第十二号)、その

ときから十年以上経ってもなお、「とどまれなかった」思いとともに、そのことを鮮明に思い出すのはなぜだろうか。もう一度考えてみたいと思う。

年長組の十二月初めのことである。

E子が保育室にいる私を呼びに来た。「いいから来てよ。早く、早く」とせきたてられて、私は廊下を走っていくE子の後を追ひ、遊戯室に急いだ。行ってみると、遊戯室の真ん中近くにワッフルブロックで細長い囲いのようなものができていた。「おうちななの。R子ちゃんと作ったんだよ」「ずいぶん大きいのができたのね。お玄関はどこかしら」「ここだよ」。E子はブロックの一部を指し示すようにはずし、「入って」と言った。この時私には一瞬の躊躇があり、思わず「入ってもいいの」とことばが出た。「いいから入って」E子のことばに押しつけて、「おじゃまします」と言いながら、私は狭い入り口から中にもぐりこんだ。一面に敷き詰められ

たブロックの上に座り、「さあ、何が始まるのかな」と思った瞬間、E子ははずしたブロックを元に戻し、「入った、入った」とはやしたてるように言った。そして、ブロックの隙間から確かめるように私を眺めると、遊戯室から出ていってしまった。それまで、E子の「おうち」で接待を受けるものと漠然と思っていた私は、ことの成り行きにびっくりし、そして「閉じこめられた」ことを悟った。

E子の「おうち」にはいつものような家財道具は何ひとつ無かった。入るとき一瞬躊躇したのはそのせいだと思う。いつもと違う何かを感じたのだ。どの時点からかはわからないが、E子はおそらく私を閉じこめる意図を持ってこの「おうち」を作ったのである。そして私はその企図にはまってしまったのである。

E子は三歳で入園してきた。母親と離れたがらずそばにしているのだが、E子が周囲の遊びに気をとられている間に、母親は逃げるように帰ってしま

う。E子はとり残されたたと知ると、火がついたように泣き、抱きとめようとする私の手を払いのけ、母親を求めて走り、いないことがわかると地団駄を踏む。私は拒まれながらも何とか抱き上げ、E子の樂しめそうなものを探すことを毎日繰り返した。E子は砂場でごちそうを作ることを好んだ。そしていつも言う。「先生なんかにあげないよ」。やがて「先生だけにあげるんだから」と言ってくれるようになったが、また「先生なんかにあげないよ」と言い出すこともあった。年長になっても、私は時折、E子が私への親しみと反発の間で揺れ動くのを感じていた。

私を閉じこめてどうするつもりなのだろう。E子は何をしに行つたのだろうか、出て行つたまま戻つてこない。じつと待つうちに、私はちよつとむつとした気持ちになつた。「先生なんか信用しない」。時々頭をもたげるE子の思いを、何とか信頼に変えてもらうべく、これまでそれなりに心を砕いてきた

つもりであつた。砂場の道具を園庭に持ち出し、洋服を汚すと怒られると言いつつ、小砂利と土と水を混ぜてごちそうを作るE子の憑かれたような様子に、私は園で初めて外遊び用のままごと道具を調達したりもした。私なりに腐心してきたのに、これは何なのという気持ちになつた。少しの間E子を待つてはみたが、まだ戻つてこない。どうしようかと思ひながら立ち上がつてみると、囲いは案外低かつた。閉じこめられたという思いが、実際以上に高いものに思わせていたようだった。こんなに低いものならE子はほんのちよつとのつもりなのだろうかここにどまろうか、それとも乗り越えれば出られそうだから出てしまおうか、私は迷つた。廊下の方に目をやったがE子の姿はまだ見えない。私は結局乗り越える方を選んでしまつた。遊戯室の入り口へ二、三步歩いたところで、いつの間に戻つたのか背後からE子の声が出た。「何だ、もう出ちゃつたの」。私はことばにつまつた。確かに私の意志でE

子の企図から「出ちゃった」のだ。でも、それを素直には認められなかった。まるで囲いが低かったからとでもいうように「そう、でられちゃったの」と言うしかなかった。「なーんだ」。もう一度E子はがっかりしたように言った。

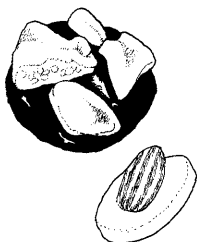
E子は、私が出てしまうとは思ってなかったようだった。出なければよかったという後悔と、E子の気持ちを裏切ってしまったことへの申し訳のなさが私の中にじわりと広がり、私はそれ以上E子と向き合うことができなかつた。焼き絵の様子が心配だからと自分に言い訳しつつ、逃げるように遊戯室を出た。

E子の私への反発は、おそらく母親への反発であろう。自分の意志とは関わりなく、母親の決めた路線を走らされてきたことへの押さえがたい思いが、今私に向けられているのだ、と理解しつつ、現実の生活の中でE子の強い反発に出会うと、私は、それが私自身に向けられているもののように感じて、落

ち込んだり反対にむつとしたりしてきた。

保育者はどんなに子どもの立場に立とうとしても、所詮権力を持つ者である。意識するとならないに関わらず、保育者の思いを押しつけている。E子は、そんな私に母親への思いを重ね、私の権力行使に逆らったり無視したりを繰り返してきたのではなかつたか。そして、今、まさに権力者としての私を封じ込めようとしたのではなかつたか。そのことに思い至らずに、私への否定的な気持ちの発現ととらえ、抗ってしまった。E子の「閉じこめたい」思いを感じとって、そこにとどまることができなかつた。私の気持ちは重かつた。

E子はもう一度私を閉じこめてくれるだろうか。もう一度閉じこめて欲しい。E子が私を閉じこめるには、遊びとは言え、かなりの心的なエネルギーを必要とし



たであろう。卒業まであと三か月、もう一度というのはとてもかなえない望みのように私には思われた。でももしそういうことがあれば、どういう状況であつても、今度はE子の気持ちに添い、そこにとどまろうと私は決心した。

二月の半ば、E子は再び私を閉じこめようとした。閉じこめられると直感したとき、私には覚悟ができていた。E子に素直に従うと、真つ暗闇の中に寝そべつた格好で完全に閉じこめられてしまった。今度は簡単には出られない。「やった、やった」と言うE子の声を聞きながら、私には何の不安もなかった。どうなるのだろうかとも思わなかった。遊戯室の床はやつぱり冷えるわなどと感じたりしていた。そして、E子は「大丈夫」と私に声をかけ、思いのほか早く出してくれたのである。

卒業式の日、E子は私に向かって大声で叫んだ。「先生も一緒に小学校へ行こう」。私は嬉しかったが、とどまれなかった苦い思いを消し去ることがで

きないと悟った。E子はエネルギーシユな子どもである。だから、二度にわたつて私を閉じこめることができた。ほかの子どもであつたら、一度抵抗されて、なおもまたやつてみようと思うだろうか。自分を受け止めてもらえなかつたと感じて、私との間に距離を置くに違いない。

私が子どもに閉じこめられたのは、後にも先にもこのときだけである。けれども、この「閉じこめられてとどまれなかつた」体験は、その後私が子ども心に添うことを考えるときの原点になつたような気がしている。

(元幼稚園教諭)

人が少ないのか”という研究を始めた頃からの疑問が、再び湧き上がってきたことがきっかけでした。

いったん頭の中にとどめていた事が、再び表面に現われてくる為には、自分自身の成長か、あるいは学問の進歩などの条件が必要になります。幼い頃の頭の中にとどめた問題の解決には、自分自身の成長が主体となると思いますが、成人になってから頭の中にとどめた問題の解決には、学問の進歩も重要な位置を占めています。

赤ワインの研究は、マスコミなどにより、「赤ワインが体によい」という話として、一般に広がりました。しかし、話をよく聞いてみると、「赤ワイン」という言葉と「体によい」という言葉がつながっているだけで、その間がどうも抜け落ちてしまっているようにも思えます。

赤ワインが体によいという本当の理由を理解するためには、少なくともいくつかの基礎知識が必要になります。ですから、赤ワインが体によいというこ

とを理解することは、本当は、ちょっと面倒くさいことでもあるのですが、ここに学問の進歩がからんでもいいのです。

赤ワインの研究は、心臓病などを引き起こす動脈硬化の予防を念頭に行なわれました。動脈硬化とは、血管の壁が厚くなって硬くなることを言います。動脈硬化が進行すると、血管の内腔は狭くなり、血液の流れが悪くなって、これが心臓の血管で起これば心筋梗塞、頭の血管で起これば脳梗塞が生じます。

この動脈硬化は、第二次世界大戦後、食事と密接に関連し、特に脂肪の過剰摂取によって生じる事が明らかになってきました。脂肪の過剰摂取は血液の中のコレステロールを増やし、このため動脈硬化が起これると言う考え方で、摂取エネルギーの四十パーセントを脂肪で摂っている欧米諸国にびったり当てはまった考え方でした。ところが欧米諸国の中で、フランスだけが例外で、脂肪の過剰摂取にかかわら

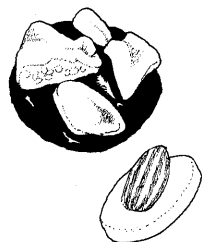
ず動脈硬化の発症が少ない為、フレンチパラドックス“と呼ばれ不思議がられていたのです。この理由はなかなかわからず、大きな疑問として頭の中にとどまり、学問の進歩を待つ事になったわけです。

動脈硬化はいろいろな危険因子によって起こることが知られています。この中でもっとも強い危険因子の一つとしてコレステロールがあげられます。血液中のコレステロールが高いと動脈硬化を起こすことは、二十世紀の初め頃から知られていたことです。その後このコレステロールには、悪玉（LDL）コレステロールと善玉（HDL）コレステロールがあつて、動脈硬化をおこすのは悪玉（LDL）であることがわかってきました。しかし、ここまで知識では、残念ながら赤ワインの関与が考えられません。

ところが最近になり、悪玉（LDL）が直接動脈硬化を起こすのではなく、悪玉（LDL）が活性酸素（酸素の中の悪玉）などによって本当の悪玉（酸

化LDL）になって動脈硬化を起こすことがわかってきました。大変な学問の進歩です。

従つて、動脈硬化を防ぐためには、悪玉（LDL）コレステロールの量を減らすことに加えて、悪玉（LDL）を本当の悪玉（酸化LDL）にしない事も重要であることが解つてきたのです。そしてこの悪玉を本当の悪玉にしないものの一つとして、赤ワインがクローズアップされ、同時にフレンチパラドックスの説明にも使われるようになったわけです。赤ワインは白ワインと異なり、ブドウの皮と種を一緒につぶして発酵させて出来た。赤ワインの赤の色はブドウの赤の色に由来し、赤ワインの苦味、渋味は種に含まれている成分に由来します。この赤い色素（アントシアニン）や苦味、渋味の成分（カテキン、タンニン）が、ポリフェノールそのもので、こ



のポリフェノールをたくさん含んだ赤ワインを飲むと、血液中の悪玉（LDL）が本場の悪玉（酸化LDL）にならず動脈硬化を防ぐ効果が期待できると言うこととなります。

うれしいことに、この赤ワインの研究は、赤ワインに含まれているポリフェノールを含んでいる他の食物に波及しました。例えば、お茶や野菜、大豆製品など、いずれもポリフェノールを豊富に持つっており、これらの食物の摂取においても動脈硬化の予防が期待できる可能性が出て来たのです。

日本は現在世界最長寿命国と知られています。これまで日本食の良さとして取り上げられていたのは、脂肪の摂り方が少ないことと、脂肪の中でも肉食よりも魚を多く摂取することが言われていました。この考え方ももちろん正しいのですが、この考え方に加えて、日本食には、実に多くのポリフェノールが含まれている事が明らかになってきました。日常的に緑茶を好み、醤油、味噌汁、豆腐、納豆などの大

豆製品を主として摂取する日本食への再評価が進んでいます。

思い返してみると、幼い頃から、母親たちから受けた食事に関する注意の多くが、赤ワインの研究から明らかになったことに合致して驚かされます。その大部分は家庭というよりは、日本全体で共有していたもので、その意味では日本人の持っていた食に対する感性の素晴らしさに改めて脱帽したい気持ちです。

私たちが頭の中にとどめているものは意識的にも無意識的にも、年齢に従って無数にあるはずですが、これらの中から一つでも多くのことを引き出したいと思っています。

（お茶の水女子大学）



障害をもつ幼児の保育(4)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

歩くということ その四

幼児期の大切さを語り合う—病院の待合室で—

病院の待合室で、私共はばったりとTくんとお母さんに会いました。

F 嬉しそうな顔をしておじぎをし、握手をして、お母さんもとっても喜びました。それぞれ診察を待つて

いる間に私たちは話をしました。その話をどうぞ。

M 待っている間に、私はTくんの隣りに行きまして。Tくんは自分から手を出してにこにこ笑って私に握手を求めました。お母さんは私にいろんなことを話しかけました。「家庭指導グループ（〇歳から幼児期の障害をもつ子どものための週二日のグループ）の時

のことが今の基礎になっていると思うんです。でも世間ではあまり認められていないけれど……」「今になつてみると、あの時のことがとても大事だったと思うんです。同じ年齢の同級生に出会ってみると……」とお母さんが言いました。

F 青年期になつたTくんとお母さんは私たちと過ごしたあの頃の幼児期のことをどう見ているのでしょうか？

M お母さんは、他の障碍の人を見ると、動きがぎこちない人が多くて、何か暗くて、うつむいてとほとぼ歩いているように見えると話しました。それに対してTくんは胸を張って、いつも笑っている。私から見てもTくんはそのように見えました。「今、ご飯食べるようになってたんですか？」と尋ねると、「今も偏食は多いけど、ご飯は結構食べます。でもあの頃何にも食べなくて、そして家庭指導グループに来ると「校長先生ーじいじ先生ー」の指をつかまえて歩き回つた。それがとっても嬉しそうでした。「あの指をつかまえて

あっちに行つたり、こっちに行つたり、ぐるぐる歩き回つて、そして先生がそれに応じて歩いたりして、大変だつたでしょうねえ」とお母さんが言うから「いや私はTくんについては、大変だなんて思ったことは一度もない」と言いました。Tくんは私の指をつかまえて、自分から歩いて、部屋の隅に行つてみたり、それからしばらく歩くと今度は中二階の上に乗まで上がつてみたり、そうやって私の方から言えば、Tくんが自分から行こうという能動性をどこまでも尊重することが彼を生かす道だと考えていました。私はそう思っていたから、Tくんが自分から「あっち行く、こっち行く」と言つても、お母さんの言によれば、「引きずり回されて三十分も一時間もあちこち歩いた」ことは全然大変ではなかった。それでお母さんも「あの時のあれですよ」と、あのときの私を認めてくれました。

F 話は戻りますけれども、Tくんが校長先生ーじい先生ーの指につかまってお母さんから離れて歩き始めたその前はどんなだったでしょうか。私の印象で

は、後ろから押されなければ動けなかったように思う。それが何にも誘わない人の手を見つけたというところがね、あの頃の良かったことだと思う。こちらからエネルギーやパワーは一切出さなくて、ただ自然な手があった。その手に縋ってみようかなと、押されるのではなく、引っ張られるのでもなくて、一緒に歩き始めた。勿論Tくんは歩行出来たけれども、歩く気がし

Tくんが、三歳半ではじめて私共のところに来たころ、Tくんは歩行はできたが、自分から歩こうとしなかった。私がそっと手を出すと、Tくんは私の両手の指につかまり、私も腰を低くして、東京音頭や炭坑節やお祭り気分のリズムを歌った。他の子がそれに合わせていた。一時間くらい、同じ場所に立ったまま、私はリズムを歌い続けることによって、Tくんと私との関係が保てるように思えて、ひたすら歌いつづけた。そのうち私が立ち上がって足踏みをするとうくんも足踏み

なかったのよね。そして手につかまって歩き始めた。

子どもが自由感をもつような保育―じい先生の指―

M ああの頃、きめ細かい保育的配慮のことを私は考えていたので、Tくんが歩くことを面白く思っていたので、かなり詳しくとっておいた記録があるので、家に帰ってから記録を取り出してみました。

をする。私が足を一步出すとTくんも足を出した。そのうち私がトランポリンの回りを、Tくんの両手をとって歩いた。やがて片手をつないでいれば平気になった。弁当の所にも歩き、Tくんの行く方向に行くつもりで歩いた。衝立の穴をくぐった。Tくんは何度もその穴をくぐった。

私が少し庭にいこうとすると、Tくんは自分から一緒に庭に出て行った。ホールの入口で中を見て立っていた。私はリズムをとりながら、片足を床に乗せると、そのうちに自分の片足をのせる。

しかし、私はそれ以上に中に入ることをしなかった。Tくんは、小雨の中を歩いて庭に行き、また保育室にいった。部屋の隅をのぞいたりした。私が腰掛けていると、Tくんはトランポリンの上の子どもを見ている。私の体がじまになると、そちらを覗き込む。私はのりおにぎりをもつてきてもらう。蓋をあげると、しめろと言う。そして自分で蓋をあげたり、しめたりする、手にご飯がついた。母は、こんなに離れたのは生まれて初めてだと言う。

帰りがけには、手を伸ばして、私に抱かれた。これは初めてである。今日一緒に歩いたことが、Tくんにとって私を理解者と思わせたのである。

一週間後

Tくんが来るところを迎えた。Tくんは、私を見ると、母から手を離して入り口から一人で歩いて、私に手を差し伸べてきた。私は、今日はTく

んは母から離れてひとりで遊ぶつもりになって来たのだと思った。

私は赤いレインコートを脱がせた。母は洋服も着替えさせるのだが、Tくんは私の両手につかまって、リズムと一緒に歩きはじめている。

トランポリンのまわりを、東京音頭、炭坑節を歌いながら、まわって歩いた。Tくんが行く方向に私はいくようにつとめていると、そのうちに衝立の向こうの部屋もぐるりと歩き、衝立の穴から出たりする。母のそばを通ってもそちらに行こうとしない。私と何度も歩く。片手をつなぐだけになる。そのうちあまり歌も歌わずに歩く。

私の手をつないでブリッジに出る。小雨が降っていて、じきにもどる。またいく。いったり来たりする。雨がやむとはだして庭に出て、水たまりにはいる。いくつも水たまりがあり、その中に入って歩いた。かなり十分に水たまりの中を歩いた。

自分から部屋に戻った。手で回す玩具に、私の手で回させる。じきに自分で何度もまわした。自分の手を自分で使うことがおもしろいようだ。玉をひとつずつ自分で動かす。

バスを自分で動かす。私が、パトカーやショベルカーを出すと、それを動かして見る。

自分の思うように動き、絵本をいじることの面白さをためしていた一日だった。小さなことでも自分でやれることがこの子に自由感を与える。いま味わいつつある自由感に対する喜び。

一週間後

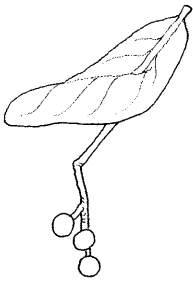
Tくんは、来ると、母にくっついていて。それでもしばらくして私の手を引くが母の手をも引く。

母がいうには、きのう訓練所にいったら、いままでのようにべったりとくっつききりではなかったという。今日は、私と歩くが母の手を離さな

い。どうも母と私が二人で関心をもちすぎるように思った。そこで、私は母と雑談をした。そうするとTくんの行動が鈍る。そして、私を呼ぶ。私はまた相手をする。雑談しながら、昨日訓練所で無理をしまして、子どもは無理をするのが一番良くないことが分かりましたという。

Tくんは意志の表現の仕方がこまかいから、小さなことを見逃しがちになることを話した。

母と私の三人で、庭に出た。音楽がかかっていた。Tくんはそのまわりを歩いた。はじめ私と手を引き、それから並んで歩くうち、Tくんが先頭になった。Tくんはひとりだけで歩き回った。



F これだけの細かい記録は読むだけで大変ですね。
M 実際にこれの何倍もの同じ様な行動とやりとりが延々と続いていたのです。

M こういう繊細な子はどの幼稚園にもいるでしょう。そのことがもう一番最初から分かったから、Tくんが小さな動きをするまでは私も自分から動かないで、Tくんの方からほんのちよつと動いたところをこつちが応えた、そこは私が非常に意識して細やかに気を遣ったことです。それはあの時期のTくんと付き合うときの大事な点だったと、今になっても私は思います。あの子の動かない様子はかなり極端だったけれど、ある程度はどの子どもにも言えることでしょう。自分から動いた小さな動きを敏感に察して応ずるのが必要なることを示してくれたのがTくんだったと思います。
F そうね。年月を経て後に記録を読むということとは、もう一度生き直すことになるのでしょうか。
M ボルノウは、「著者が自分自身を理解していた以上によりよく彼を理解する」ということは、いかなるこ

とか」という問いを出して、「読者は著者と同じように著者を理解するだけではなく、さらに著者が自分自身を理解した以上に彼をよりよく理解しなければならぬ」（以文社）と言っています。私共が自分が書いた記録を読むというのは自分が読者になることです。記録を記したときに自分が何を言いたかったのかを明かにすることは、私にとつていまの課題です。

非存在から存在を確かめる遊び

―もつと違った自分を期待する大人に抗して―

F その後あなたがあんまりTくんとかかわれなくなつて、引き受けたのが私です。

私もこれまでのことを見ていたから、なんとかしなきゃつていうようなパワーは出さない。ただ自分で動きたせればいいなあと思つて付き合っていたら、校長室と応接室に行つて、それで応接室のソファに座つて窓から外を見ていました。お昼になつてもヨーグルトの四分の一をやつと食べる。お母さんのために何とかし

て少しでも食べさせてあげたいと思ったけれど、本人が食べるということを拒否してたのね。そして体も小さいし、弱いし、これでどうなるだろうかと思っただけけれども、そのうちに何かの拍子で階段を上がって二階へ行きました。二階には他の子は来なかったから、比較的静かな空間で一番奥の部屋は特に静かで、そこでTくんと私と二人つきりですつと過ごすことになりました。それは一時間とか二時間というものじゃなくてね、もう朝から帰るまでその奥の部屋で過ごすことになって、そしてTくんは自分の顔を伏せて「ない、ない！」って、言うのです。Tくんが「ない、ない！」と言うとね「あれ、Tくんいないぞ。どこ行っただ？」って、私が探すわけ。そして少ししたつともう、おかしくしておかしくてたまらないっていうようになって、フツと顔を上げてね「いたー」っていう、存在と非存在の間を揺れるっていう遊びを二時間も三時間もやる。

F 自分の存在を消したいというような思いと、でも

探し出して愛して欲しいっていうその間をあの人は揺れたように思う。だけどそのときの私にはTくんの気持ちがよくわからないので、それにつきあうのは本当にね大変でした。他の子を全然見ることができなくて、あの子にだけ向き合っていました。

M そうしないとTくんは承知しなかった。

F Tくんは他の子が来ると他の部屋に逃げて行くことになったから、あのときは私にとっては本当に忍耐のいるときでした。「ない、ない」っていう否定の言葉だけが出てきて、何にも肯定の言葉が出てこない。それを長い期間やったと思う。そして「ああ、あれは本当に辛かった」って、何かの研究会のあるときに言ったら、「F先生はあれが好きでやってるんだと思った」ってスタッフの人から言われたときにはね、ちよつとショックを受けた。でも考えてみると、外からは楽しそうに見えるくらい、自分の心を励まして、明るく、陽気にやらなければTくんの非存在に自分まで一緒に巻き込まれて非存在になってしまうというように危機

るうちに、若い男の先生の手にもつかまるようになってきた。はじめは若い男の先生なんてとんでもないっという感じだったのがこの遊びによって人に対する心が広がったと思う。

M この経過を見ると、一番最初受けたのは私で、そのうちに私がどういうわけだかもTくんの所に留まれなくなった。それであなたがその後を受け、やがて若い男の先生が一緒にかわることになった。そのことを考えても、こういう子どもの保育は一人ではやりきれなくて、ある程度長い期間にわたって何人かの人で臨機応変に、そのときに出会ったところで展開していくことが、保育の大事な点でしょう。

「主体的に歩く」から「主体的に生きる」へ

F 私はあなたが幼い子と付き合うのを見たり、何人かの親子と出会って、手のつなぎ方を見るようになりました。その中には子どもと大人との関係の在り方が見えるのです。幼い子の手首をがっちり握って自由

を奪うような手のつなぎ方もあります。もちろん道路に飛び出さないようにという配慮もあるでしょう。しかし、ある父親が足腰に不自由のある子が、ころびそうになりながらも自分で歩き始めたとき、「これだけが揺れるのだから、手をつないでしまったらこの子は自分らしく歩けないでしょうから、自由に歩かせてください」と言われたことは忘れません。手をつないで歩くことが、その子を支えるつもりが、いつのまにか親も教師も、子どもの主体性を奪う恐れがあることに気付かされました。

Tくんのお母さんが、「JーJ先生の指」と言っていることも大切なことを指摘しているように思えます。「手」ではなくて「指」と言うとき、こちらのパワーは十分の一になるのですね。パワーを抑え、大人の在り方について考えさせてもらいました。

M そのことがあるときもつと言いたいと思っただけ話し足りなかったことだったと思います。

有機物が土に還る・堆肥づくり

徳野 雅仁

土が硬いと植物はしっかり根がはれず、土中は酸素や水分が少なく、栄養分も不足した土地になっています。草が生えず、枯れて土に還る有機物がなければ、養分が土に蓄積されないため、このような場所にタネをまいても作物は育ちません。

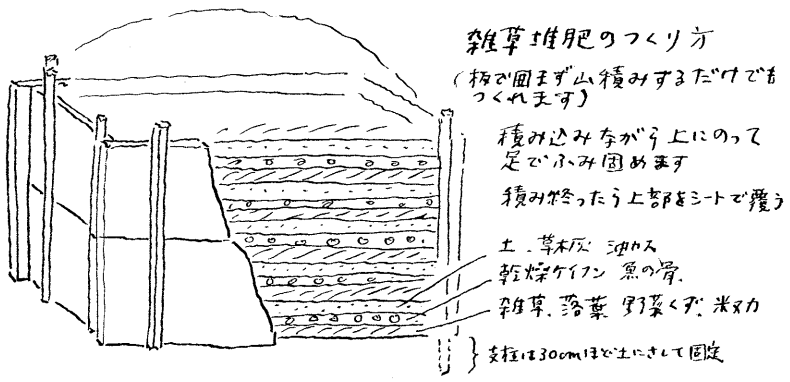
畑に生やした夏草が繁茂するころ、株元の地面を見ると、土中からはき出されたと見られる団粒状の土が表土を覆いはじめています。刈りとった草をしばらく山積みしておくとその下の表土はいっしょか団粒土に変わっています。いずれもミミズの糞が堆積したものです。植物は枯れると茎葉から根に至るまでミミズや、さまざまな虫やカビ類、微生物によって分解され、分解される際の分泌物によって団粒土が形成され、栄養分を含んだ土がつくられます。森が自らの葉を落として堆積し、豊かな土を生み出しているように、土と植物と小動物、カビ、微生物による共生と営みによって草が育ち、作物が育つ土壌になります。自然界の営みを生かし、養分豊かな土を人為的に再成したものが堆肥で、ヤセ地を生き返らせ、作物を健康に育てる堆肥があれば、野菜づくりの楽しみも増すことでしょう。

堆肥づくりは、大きく分けて、台所から出る野菜くずや茶がら、細かく砕いた卵や貝の殻、魚の骨、海草や残飯を材料に積み込む方法と、畑で刈りとった草や野菜くず、細かく切った木の枝や枯れ葉、米ぬか、もみ殻、

乾燥鶏ふん、油カス、草木灰など数種を積み込む方法があります。前者は、そのつど出る野菜くずを臭いが出る前の新しいうちに、市販されているコンポスターか、畑のすみに随時、満杯になるまで積み込みます。畑に用意する堆積場は直径四十センチ、深さ二十センチの穴を掘り、ここに材料を入れ、同量の土の上に乗せます。土には脱臭効果がありますから材料を覆えば臭いは出ず、小バエの発生も防げます。四週目に入るころからとさおり切り返し、高さ三十七センチ前後で積み込みを終了します。新たな材料の積み込みは別に堆積場を用意し、同じように行います。

トウモロコシや収穫後の夏野菜の茎葉、雑草を大量に積み込む場合は十一月ごろ、日当たりのよい場所に、五坪の畑なら一メートル四方の堆積場を用意し、材料を交互に、サンドイッチ状に土をはさみ、水を打ちながら一メートル五十センチほどの高さに積み上げます。積み終えたらシートなどで覆うと発酵が促進し、堆積一週間後には分解による発酵熱で内部の温度が五十〜七十度上がります。積み込み一カ月後から二〜三回切り返しをしていくと、翌年五月には材料はあとかたもなく消えて黒々とした団粒土が誕生します。積み込み作業は楽しく、材料が数カ月で消える不思議さは子どもにとってもおどろきであるにちがいません。

(イラストレーター イラストも筆者)



「病院ごっこ」と「ゴム鉄砲」

阿部 康子

運動会では精一杯走った、宇宙旅行の身体表現をした。子ども祭りではおもちや屋さん、射的場、音楽会と
思い思いに仲間で計画をして、小さいお友達を招待した。小さい人達が喜んでくれて、そのことが一番嬉しかった。小学校のお姉さんお兄さんに招待されて小学校へも行った。広い運動場や体育館にちよっぴり緊張しな

がらも面白かった！

そんな十月を過ごして、十一月は再び自分達の生活の中でどんぐり、やしゃぶしの実を集めてはご馳走を作る、そしてパーティーを開いて楽しい。りょうへいが始めたどんぐりごま作りが広がって、三十個、四十個とどんぐりごまが増えていき、小さい人達へのプレゼントを

思いつく、ということがあったり、たつま、こうき、ゆうき、たかゆき、こうすけは相変わらずゴム鉄砲作りに集まり、輪ゴムがより遠くへ飛ぶように、より大きく形のよいものを、とこだわり続けている。「せんせい、こんとこ持ってて」「色のついたゴム出して」「ねえ、見て、よく飛ぶで」とそれぞれが工夫しながら競い合う姿があった。バドミントンに夢中のでつや、ゆうたは、三回位はリレーが出来るようになって嬉しい！ あすか、れみがゼリーカップに木の実を入れて「音がする」と、互いに音を出し合って面白がっているうちに、それを見たなこの発案で「音楽会をしよう」ということになった。以来、二週目に入っても、メンバーは替わりながら積み木のステージは賑わっている。自転車に乗って走り合うのも、縄跳びも、誰かが始めては広がって楽しい、そんな日常が繰り返されている。

十一月二十七日（火） 晴

今朝も子どもたちは登園すると、昨日の続きを始める

人、面白いことはないかと探す人、「自転車へ行きます」と園庭を目指す人達で始まった。

さとこ、ななこが園庭を小走りで登園してくる。さとこの手元で大きな紙袋が揺れている。「おはよう、すごいパワーね。いいことあったのかな？」と迎える私に「これ！」と手にしていた紙袋を差し出した。「なにかな？」と受け取り袋の中を覗こうとすると、「看護婦さんの帽子」と笑いながら取り出した。そうか、昨日の降園間際に「明日病院ごっこやりたい」と言っていたのを思い出して、「いよいよ病院ごっこが始まるのですか」と受ける私に、「うん、まあね」と答えながらななこを見る。ななこはすでに登園しているあすか、れみのところでどنگりマラカスを前におしゃべりをしている。さとはこは私に目を移し、「どうやればいい？」と聞いてきた。「病院ごっこのこと？」
「うん」。私はさとこの中に
ある病院ごっこのイメージを



▲看護婦さんの帽子

探りながら「どんな病院をやりたいのかな？」と返す。

「うーん、足が痛い人とか、熱を出した子どもが来るの」「そうか、じゃあ何があるかな」。さとこは少し考えて「薬があるよ」「うーん、薬ね、大事だもんね。どんなお薬作るのかな？ いるものがあつたら言つてね」。

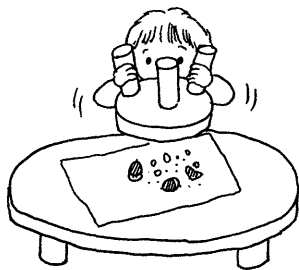
「うん」と答えてさとこはななこの方へ行つた。

私は、ゴム鉄砲作りの人達に材料を揃えながら、さとこがこれほど熱心に「病院ごっこをやりたい」と言つてきたのは、九月の「三匹のやぎのらがらどん」のお話ごっこ以来のことだ、と思つた。どちらかといえば、友達に「〇〇やろう」と誘われれば「いいよ」と協力を惜しまず、楽しそうにアイディアを出したりしながら中心となつて遊びを進めているが、さあお店を開こう、皆に見て貰おう、聞いて貰おう、という段になると「私はい」と外側の人になつてしまう姿が度々あり、気になつていたところである。さとこの病院ごっこを最後までさとこの手で達成させてやりたいと思ひながら、今日は小学校五年生のお兄さん、お姉さんからの招待を受けてい

ることから、「病院ごっこをやりたい」の準備は明日からということになった。

十一月二十八日（水） 晴

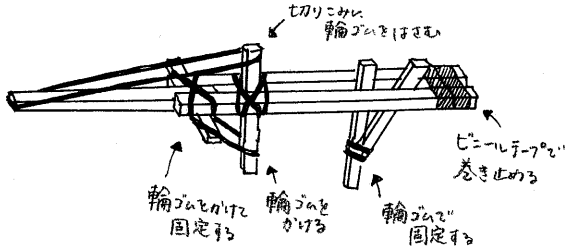
病院ごっこ さとこは登園すると、空箱、木の実、紙類等の材料置き場の前で何かを探していたが、どんぐりを箱に幾らかいれてままとコーナーへ持つて行つた。暫くするとみさと、ななこ、れみも入つて行つた。「何か始まつたな」とやや時間をおいて覗きに行く。ままとコーナーのテーブルに紙を敷き、ままと用の木の丸椅子を逆さまに持つたさとこが、テーブルの上の物を打つている。よく見ると、ドングリの実を砕いている。横でみさとがドングリの皮を剥いている。あやかが「ドングリの実、入れる？ 粉を集



▲ドングリの実を割って薬を作る

めていい？」と話しかけるが、そこはそれに応じる余裕がないのか、黙ったまま打ち続けている。さくみがある隣の座って、ドングリの実が小さく砕けていくのを眺めていた。ななこ、れみ、あすか、るりは少し離れた場所で小さな袋を作っていた。包装紙を切る人、筒状に折ってテープで仕上げる人、時々役割を替わりながら、出来栄えを見せ合い、賑やかにやっている。

ゴム鉄砲作り 一方、ゴム鉄砲作りは、ゆうすけが「昨日家でお母さんと作った」と、図のゴム鉄砲を持参したことから、たつま、たかゆきが「作りたい」「作ろう！」となって、私は造形コーナーに居続ける



▲ゴムでっぼうの作り方

ことになってしまった。このゴム鉄砲は、図のように何本かの長さの異なる割り箸を組み、何か所も輪ゴムをかけて止めなければならず、大人の手を借りずには出来ないものである。このゴム鉄砲づくりは十月にも何度か出たが、自分で出来るようになるまで待つことになっていたのであるが……。結局は、子どもの「難しいけどやってみよう」という気持ちを、受け入れることにしたのである。

たかゆき、たつま、こうき、りようへい、ゆうきが、何度もやり直しをしながらなんとか作り上げた。そして再び射のごっこが始まった。

病院ごっこの方は、薬作りと薬袋が幾つも出来上がり、「看護婦さんの帽子が欲しい」「明日作ろう」と、降園を迎えた。子どもも保育者も忙しい一日であった。

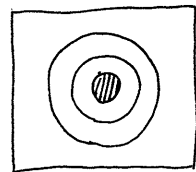
十一月二十九日(木) 晴

病院ごっこ さとこが「看護婦さんの帽子を作らんといいかん」と、今朝は薬作りから帽子作りになった。さとこ

の持参した帽子を見本に画用紙で作ることになり、あすか、れみ、るり、ななこたちは、ピンク、黄色、ブルーと色画用紙を切り、縁を折り込み、出来上がると帽子を頭につけて大満足！ 帽子作りを提案したさとはこの作業には参加せず、ままごとコーナーに入り、ドングリをせっせと砕き、薬作りに取り組んでいる。傍らであやかとみさとが皮を剥く。あやかが「私にもやらせて」と時々頼むがさとはに無視され、自分でも積み木を台に始める。思うようにドングリが砕けず、何度もさとはのそばへいき、やり方を見ては自分の場所に戻り、作業を繰り返す。そのうち、少し大きめではあるが、ドングリが一粒二粒と砕け始めた。よほど嬉しかったようで「せい、みて！」と私を呼びにきた。帽子組も、「あやちゃんも薬作つとる」と新しく始まったあやかの作業をちよつと驚いたように見る。

ゴム鉄砲作り たかゆきとたつまは、登園するなり、自分のゴム鉄砲を取り出し、輪ゴムの飛び具合を試した

り、二人で飛距離を競い合っている。ゆうき、りょうへい、ゆうすけが登園して、ゴム鉄砲の飛ばしあい



▲ゆうきが初めに描いた的

は賑やかさを増している。ゆうきが「的を作らんといいかん」と言い出し、広告紙の裏が白いのを探し、円を三重に描いて壁に張り、さらに点数表があると、一番外側の円は10点、次の円は20点、真ん中は100点と、何度も書き直しながら書き入れたが、たつまは「射的は違うのがいい」と言い、「先生、どうやって作りゃいい？」と聞きにきた。「夜店なんかでやってるのかな?」「ロボットとかうさぎさん、車なんかを描いて立てればいいのかな?」と、よく分からないまま話していると、りょうへいが「これ」と人形を作って持ってきた。「人形はかわいそうよね」と賛成しかねている私に、「おもちゃならいいら」と人形の作的作りになってしまった。とにかく、ゴム鉄砲組は再び忙しくなり、出来上がった人形を

次々に積み木の上に並べ、思い思いに狙いを定めて輪ゴムを飛ばし始めた。

十一月三十日（金） 晴

病院ごっこ 昨日に引き続き、さこの薬作りが始発となつて病院ごっこが始まった。あやかも得意気に薬作りに参加している。ななこは、薬袋に朝顔やおしろい花の種を入れて「はい、これはお茶」と言つてあすか、みさと、れみ、私にも配ってくれた。「ごちそうさま、美味しいお茶ね」とお茶を飲んでみると、さどこが覗いて「お茶は後じゃなかった？」とななこに言う。「あつ、そうだった」とななこは配つたお椀を集めてままごとの棚へ片付ける。そこへるりが登園して看護婦帽を頭につけ仲間入りすると、これを見たあすか、れみ、みさとも看護婦帽を被り、ままごとコーナーの入り口に花ゴザを敷き、積み木で囲い、子ども用ベッドを運び込んだ。いよいよ病院が始まるかな、と見ていると、れみの発案でシール作りが始まった。（紙に水性マジックで絵を

描き、セロハンテープを上貼り、絵を写し取る）「それは何？」といぶかしがる私に、「お注射の後であげる」と言う。四月、五月の遊びでは、シール作りが流行し、クジ屋さんの景品だったり、年少さんへのプレゼントだったりしたシールである。久し振りのシール作りで熱が入ったのか病院の方はなかなか開院とならない。私が「お腹が急に痛くなったので診て下さい」と行く。「もう少し待って下さい」とさどこの声。すかさずななこが「あすかちゃんたちが年中さん呼びに行っちゃったよ」と言う。そんなやり取りの所へ、年中組の先生と一緒に「病院はここですか」と年中さんがやって来た。れみはそれを見て「はい、こちらです」と自分の所へ呼ぶ。小さい人達が列を作つて並ぶ。ななこ、あすかたちは薬を袋に詰める。鉛筆の注射が終わつた人に「ご褒美」と言つては薬の袋とシールを渡す。こうして病院ごっこは最終段階を迎えた。さどこは、薬作りから離れて、小さい人達が訪れてくれた様子をれみの後ろから眺めて嬉しそふであつた。

ゴム鉄砲作り 一方、ゴム鉄砲作りは、今朝は早く登園したりようへいとたかゆきが積み木で射的台を作り、昨日作った的を並べて射的を始めた。少し遅れて登園したたつまが登園活動を終えると射的台へやってきて、「どいて」とりようへいを押し退けて射的を始めた。りようへいは何も言わずに横に出してしまう。そこへたつま、ゆうすけが登園し、射的の様子を見るなり「やらせて」と入って、射的台の前には完全にりようへいの場はなくなってしまった。その状況を見ていた私は、思わず、「この台はりようへい君とたかゆき君が作ったのよ。お友達の作った場を押し退けて占領するのは良くないよ。たつま君たちも皆でやるにはどうしたらいいか考えようよ」と、射的台をひろげることを提案した。たつまは「そんなことは知らなんだ」とちよつとおどけながら、ゆうすけ、たつまとりようへいが入れる場を作り出した。射的台を作った一人がりようへいと分り、りようへいの立場は皆の認める所となった。

射的台の前に、横一線上にたつま、たかゆき、ゆうすけ、たつま、りようへいの五人が並び、互いに、的に当たった、的の人形が倒れた、なかなか当たらない等おしゃべりをしながら、楽しい賑わいが続いた。そのうち、たつまが撃つ場所と積み木の射的台までの



▲びょういんごっこ

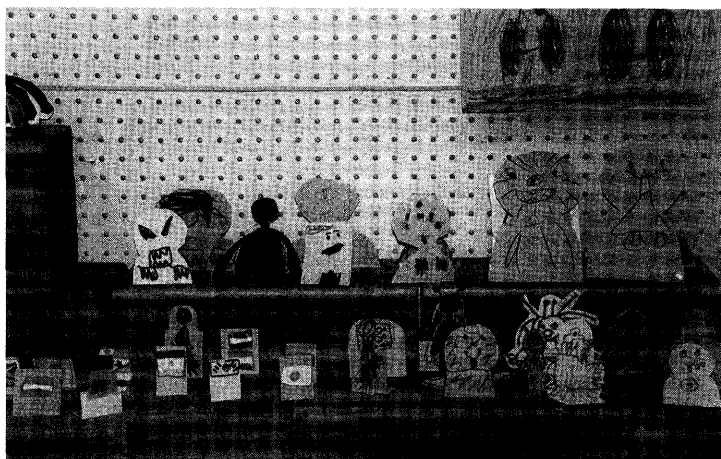
距離を何通りかに設定して競争しようと言い出し、青いビニールテープを床に貼って作ることになった。「おれがやるワ」とりようへいがこの役を引き受け、自分の手幅で測っては、三通りの線を作った。この頃にはゆうき、ゆうた、こうきも仲間入りして、一段と賑わいを増していった。りようへいはビニールテープの端をたかゆきに押さえて貫いながら線を貼り終えると、射的には加わらず、友達の競い合う様子を面白そうに眺めていた。

二つの遊びから保育者が見たもの

病院ごっこ さとこは、日常の遊びでは描いたり作ったりを好み、紙で手提げポーチやお花、シール等を作ってくじやさんの景品にしたり、地図や迷路を描いてキャンブごっこに使ったりと、遊びを進めていく。友達からの人気もあり、「さとこちゃん仲間に入れて」「さとこちゃん〇〇ごっこしよう」と誘われることも日常的にあり、本人はその都度「いいよ」と応じて楽しむ姿がある。しかし基本的には仲良しのさくみ、るりたちと二人、三人

で行動することが多く、五人、六人という大勢の仲間音楽会をしよう、お店を開こう、となると、準備段階では楽しいが、いよいよ開店となると見る側に、つまり外側に回ってしまう姿がある。九月、『三びきのやぎのがらがらどん』のペープサートをしようとさとこが始めた時も、ペープサートに強い興味を持って仲間入りしてきたゆうき、りようた、ゆうすけたちの勢いに飲み込まれ、準備は一緒にしたものの、「演ずる」段階では観る側に回ってしまった。

以来、私はそんなさとこの姿が気になっており、今回の「病院ごっこがやりたい」ではさとこの思いをなんとか実現させたいと思った。どう実現させていくかでは、実際にさとこが始発の段階で「どうやればいいのか？」と尋ねた時、「病院ごっこには何があればいいかな？」とさとこが問題としたことをさとこに返し、さとこその仲間それぞれに任せて、私は材料調達係に回った。それは私のどこかで、子どもたちの遊びに、病院らしさとして、一つの型を求めそうな自分を警戒してのことでもあり、



▲的が並んだ射的台

さとこと子どもたちの「病院ごっこ」をより自由に楽しんでほしいと願ったからである。二十七日（火）～三十日（金）の経過では、子どもたちは思い付くまま準備を進め、その場面場面では真剣に取り組み、自分達の発案と出来栄えに満足した姿で年中さんを迎え、賑わい、面白かった、嬉しかった。さとこは、二十九日（木）の帽子作りには、参加せず外側から傍観する姿も見られたが、全体の流れの中では最後まで中心的な役割を持ちながらやり終えた。このことは、以前の遊びからは一つの成長が見られ、私にとっても嬉しいことであった。ただ、「ごっこ」という遊びに対して、もつと適切な指導があったのではないか。例えばさとこと一緒に何が必要かを考える、どのように備え、どう運ぶか保育者も一緒に作り上げていく、等々の思いが残った。

ゴム鉄砲作り「ゴム鉄砲作り」は、二学期に入って男の子の間でゴム鉄砲を作る、より工夫して格好のよいものを作って輪ゴムで飛ばす、が遊びの中で出たり消えたりしながら楽しまれている。今回の遊びでは、ゴム鉄砲作りや、迷路ゲーム作り、コマ作り等、作る活動での、りょうへいの着目の面白さ、自分の思いに近付けようと

何度も工夫する姿など、他の子どもたちにも一つの刺激となることがしばしばあったのに、回りの友達との関係性がなかなか強まっていけない、コミュニケーションがうまく取れていないように思われた。そこで、りょうへいに視点を当てることで、りょうへいへの理解を進めたいと考えた。

この遊びで、りょうへいは射的台をたかゆきと積木で組む、的の人形を並べる（場面①）、自分で何度か撃つてみる、たかゆきと二人で的に輪ゴムの当たる回数を数えたりして楽しい場面（場面②）、何人かの友達が登園して撃つ人が増え、「どいて」と自分の場所を追い出されると黙って出る場面（場面③）、再び仲間入りして並んで楽しそうに撃つ場面（場面④）、さらに、撃つ距離に変化をつけて線を作ろう、となったとき、それまで会話らしきものがなかったのに「おれがやるワ」とテープ貼りをつけてた場面（場面⑤）、と大まかに分けられるが、この中で、りょうへいの三つの側面が見えたように思う。場面①と②では友達と一緒にやるのが楽しい

姿があり、場面③ではなにも言えずに自分の場を押し出されてしまう、コミュニケーションがうまく取れない姿が見られる。場面⑤では、たかゆきに手伝って貰いながらではあるが、一人で間隔を取りながらビニールテープを貼り、一本ずつ確かめながら線を引いていくことがいかにも楽しい姿があった。

このことから見ると、りょうへいの気持ちの中に一人の世界が楽しい、でも友達ともやりたいという気持ちがあり、その間で揺れているのではないか、と思われる。一方で友達とかかわりたい気持ちはあるが、コミュニケーションの取り方がよく分からない、その為にトラブルになりそうになると引いてしまうのではないか。以上から、今後の課題として、まずコミュニケーションが出来るやすい環境、場を用意してりょうへいを巻き込んでいく、そして友達と一緒にやるのは本当に面白い！とりょうへいが感じられる場を一つずつ増やしていくことではないかと思った。

（愛知双葉幼稚園）

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(3)ブルデュー社会学におけるハビトウス概念

安田 尚

今回は『実践感覚Ⅰ』の「第三章 構造、ハビトウス、実践」を読んでみることにしよう。本章では第一章と第二章の統一、つまり実践をめぐる客観主義と主観主義の止揚（批判と統合、展開）がテーマとなっている。それを可能にするのが「ハビトウス概念」にほかならない。

ハビトウス、構造とは？

さて、ブルデュー社会学において再定義され、その特有な概念となった「ハビトウス」の由来について説明しておこう。周知のようにこのハビトウス (habitus) という用語は、アリストテレス以来の概念であるが、ギリシア語ヘクシス (hexis) をスコラ

哲学の大成者トマス・アクイナスがラテン語ハビトゥスに訳したものとされている。その後、「ヘーゲル、フッサール、ウエーバー、デュルケム、モースといった、実に多様な著作家によって、数限りなく用いられた」とブルデューは、指摘している（註1）。さらにブルデューはこの旧来から使われてきたハビトゥス概念を「全面的に考え直した」とのべている（註2）。

ブルデュー自身の解説によれば、その一般的な意味は次のとおりである。ハビトゥス概念の歴史をつらぬく意味は、「習得された、恒常的で生成的な性向のシステム」である（二四九頁）。

ところで、本章ではハビトゥスについては、詳細に論じられているが、「構造」については説明されていない。すこし補足しておこう。ブルデューの場合、構造とは「目に見えない客観的諸関係」である。行為者の意識や意図を超えた関係性である。行為者には見えないもの、つまり経験的には把握できないもの、意識

されることのない関係性が「構造」である。しかも「構造」は行為者に絶大な拘束力をもっている（註3）。

まずブルデューは冒頭で、本章の戦略的課題を提示する。それは、客観的な関係を「個人と集団の歴史の外ですでに構成された実在」とする「構造の実在論」、つまり構造の実体論である。「客観主義」にも、かつまた「社会的世界のもつ必然性を全く説明しえない」「主観主義」にも陥ることなく、行為の理論を打ち立てることである。そのためには、ハビトゥス概念をてがかりに「実践」プラクティックそのものに立ち戻らなければならない（八三頁）。

さて、実践とは何か。それは「歴史的实践の客観化された生産物と身体化された生産物との、「つまり」構造とハビトゥスとの弁証法の場合〔交点〕である」（八三頁）。すなわち、実践とは構造とハビトゥスの弁証法的関係項、弁証法的遭遇の場である。行為者の

内部に身体化されたハビトウスと、行為者から独立した客観的構造との遭遇が実践だというのである。

ハビトウスの概念規定

ついでハビトウスの概念規定がおこなわれる。まずハビトウスを生み出すのは、「生活条件の特定の集合と結び付いた様々な条件づけ」である（八三頁）。そして、「ハビトウスとは、持続性を持ち移調可能な性向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の生産と組織化の原理として機能する前以て傾向性を与えられた、構造化された構造である」（八三頁）。

ひとまずハビトウスは、性向のシステムとされ、その働きは実践と表象を生み出すということにある。この実践と表象は、計算合理性の所産でも、規則への従属の結果でもない。さらに、ハビトウスを構成する性向 (dispositions) は「持続性」をもちながらも「移調

可能」、つまり変形や修正が可能なものとされる。ここで言う「移調可能」^{トランスポザブル}とは、多様な実現形態をとりながらもその原理、構造を変えないという意味である。

さらに、ハビトウスが実際にどのような機能するか語られる。「ハビトウスの反応は、まず計算を度外視して、客観的可能性との関係で規定〔決定〕される」（八四頁）。この客観的な可能性は、行為者の直面している現在の状況に書き込まれている。ハビトウスは、この可能性を認識し、評価することによって、その状況に反応するのである。こうして行為者は、客観的可能性に主観的願望（「動機付け」と「欲求」）や目的を見つけたし反応する、つまり実践するのである。そこには、客観的可能性と目的や主観的願望との相関関係が成立する。性向が持続的に教え込まれる結果、やれること（可能性のあること）しか望まない（主観的願望）が、習い性、つまりハビトウスとなるのだ。だから「可能性の低い実践は、考えられないもの」

(八五頁)として、はじめから排除されることになる。

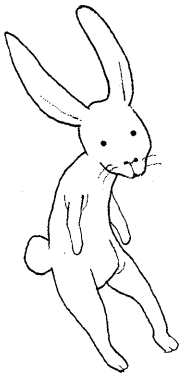
ハビトゥスを形成するのは、家庭

さて、このハビトゥスはいったいどこで形成されるのであろうか。それは、生活条件の特定の集合である「階級」において、さらにそれが具体的に現象する「家族」においてである。経済的・社会的必然性という「外的必然性の固有な家族における現れ(両性の分業形態、物の在り様、消費の形態、親族との関係など)を通じて」ハビトゥスは形成される(八六頁)。このように「家族」において生みだされたハビトゥスは「それ以後はあらゆる経験の認識と評価の原理」(八六頁)となる。このように原初的なハビトゥス形成の場は、家族なのである。ブルデューが教育の原理論とも言うべき『再生産』や、『遺産相続者たち』において、家族における「一次的教育」や家族から相続

した「文化資本」の重要性を強調するのは、このためなのである。

ハビトゥスは、歴史の産物

ところで、ハビトゥスは歴史の産物でもある。そして、このことが主観主義に対しては実践の「恒常性」や「規則性」(いつも同じことをする)を、客観主義に対してはハビトゥスの「無限の能力」や「相対的自立性」を対置する根拠となる。すなわち「歴史の産物であるハビトゥスは、個人的・集団的実践を、したがって歴史を、歴史がもたらした図式に沿って生産する」(八六頁)。すなわち、ハビトゥスは歴史の産物で



あるとともに歴史を生産する。しかも、ハビトウスは歴史の産物である「図式 (scheme)」にもとづいて実践を生み出すことで、歴史をつくるのである (ここでいう「図式」とは本連載一回目で述べた「身体化された分類図式」のことである。本誌七月号、二四〜二六頁を参照)。

「そうした過去の経験は、それぞれの身体に認識・思考・行為の図式の形態でたくわえられ (沈殿し)、どんな正式な規則よりも、どんな明示的な規範よりも確かに、時間の経過の中で、実践どうしの整合性と実践の恒常性を保とうとする傾向をもっている」(八六頁、傍点■安田)。

したがってハビトウスとは、進行しつつある現在の中に存続する過去であり、その原理 (■ハビトウス) によって構造化される実践の中に姿を現すことによって、将来にわたって生き長らえようとする過去である。

ハビトウスはこのように持続する過去として、すなわちその恒常性、規則性によって特徴づけられる。

同時にそれは限定付きの「無限の能力」■自由でもある。ハビトウスは、ハビトウスの生産条件の限界内で、認識・思考・表現・行為を自由に生み出す無限の能力である。「ハビトウスは、構造の産物であるが、その構造はハビトウスを通して、機械的決定論のようにはなく、ハビトウスの発明に最初から与えられた拘束と限界内で、実践を支配する」(八七頁)。すなわち、構造、ハビトウス、実践の三者の間には、構造↓ハビトウス↓実践の関係が成立する。構造はハビトウスを媒介として、実践を生み出すのである。さらに後述するように、実践が構造 (■制度) を生み出すことによって、この三者には円還的關係が成立する。

ハビトウスは過去の産物であった。しかし実践そのものは、過去の社会的条件からも現在の社会的条件からも説明できない。なぜなら、実践を説明しうるの

は、ハビトウスが生産された社会的条件とハビトウスの行使される社会的条件を関連づける場合だけだからである。しかし、この「関連づけの捨象を可能にするのが、『無意識』である。この『無意識』は、結局は歴史の忘却にほかならない」（八九頁）。つまり、ハビトウスは、「身体化」され、「自然化」され（自然なこと、当たり前のこととされ）、「忘却された歴史」である。

したがって、「ハビトウスは、実践に直接の現在が課する外的決定に対する相対的自立性をあたえる」ことになる（八九頁、傍点〓安田）。すなわち、ハビトウスは「身体化」され、「自然」となった過去の社会的条件であり、「忘却され」て「無意識」となっているの、実践には自立性があたえられるのである。

つまり、実践が外的強制の形態をとらず、むしろ自発性の形態をとって現れることに注目しておきたい。「忘却された過去」であり、「身体化された過去」で

あるハビトウスが、実践の自立性の根拠なのである。

この「相対的な自立性」こそが、人間の「自由」にほかならない。つまり、「この自立性は、作用を受けながら作用を及ぼす過去の自立性であって、この過去が蓄積された資本として機能しながら、歴史から出発して歴史を生産し、個々の行為者を世界の中で一つの世界にする変化の中で恒常性を保証するのである」（八九頁、傍点〓安田）。人間の自由の余地はここに残されている。

要するに、忘却された過去の産物であるハビトウスは、現在の状況からの要請に前以て実践を調整することによって実践に自立性を与えるというのである。

ハビトウスと制度

さらに、ハビトウスと制度との弁証法的関係が論じられる。ここでは、実践はハビトウスと制度との弁証法であり、この弁証法が即興、発明、歴史の創造を生

み出すこと、また制度はハビトウスによってその意味や機能を再生産されること、制度の存立基盤は行為者のハビトウスにあること、ハビトウスと構造「制度」の一致が「常識」を生み出すことが語られる。

「行為のリアルな論理は、歴史の二つの客体化を、つまり身体における客体化と制度における客体化を、同じことだが、客体化された資本と身体化された資本という資本の二状態を対立させる」(九〇頁、傍点〳安田)。つまり、ハビトウスと制度の対立―弁証法的な意味での―が行為のリアルな論理だというのである。この歴史の二つの客体化によって、「必然性やそれがもつ急迫性との距離がうまれる」(九〇頁)。歴史の二つの客体化、資本の二状態、つまりハビトウスと制度が対立することで実践の自由、創造性が生まれる。こうした「距離」の典型的な例が、「規則に適った即興」という「意図せざる発明」にみられる「表現する性向と表現手段(語形論、構文論、語彙的な道具、文学

ジャンルなど)との弁証法」

(九〇頁)である。

このことは「機知」^{エスプリ}、「洒落」がどうして生まれるかを説明する。それは、「ハビトウスが自由に使いこなせる表現方法に完璧に精通している

ので、この表現方法が必然的に含んでいる可能性のうちで最も希少なものに到達」できるからである。つまり、「機知」とはハビトウスが蓄積した方法を状況に応じて駆使することを意味する。「機知」は全くのゼロから生まれるのではなく、蓄積された文化資本の活用、増殖にはかならない。「天才」や「才気」とい

えども学習の成果なのだ。ハビトウスは実践をとおして制度を活性化し、再生産する。「ハビトウスは実践感覚をとおして、制度に客体化された意味^{センス}方向を再活性化する」(九一



頁)。しかも何ほどかの「修正」や「変形」を制度にくわえながら、ハビトウスは制度を再生産する。そしてハビトウスの「身体化のおかげで、王、銀行家、神父は人になった世襲君主制、金融資本、教会になる」。いかえるとこれは、制度が身体化されたハビトウスによってその意味を再生産されていることであり、制度の「人格化」である。マルクスが「資本家の『人格』は、資本の『人格化』である」というのは、この制度の「人格化」を意味している。つまりこれが、制度と実践の相互再生産であり、「社会化」にはかならない。

要するに、制度が存続しうるのは、「物」と「身体」にハビトウスが客体化＝身体化されているからなのである。ブルデュー社会学の場合、構造が行為主体にとって超越的な存在とはされてはいない点に注目したい。つまり、ハビトウスが、実践を媒介として構造を支えているのである。こうして「構造の实在論」が乗

りこえられるわけである。

さらにまた、この制度とハビトウスの一致によって「常識」^{サンス・コマン}や「コンセンサス」の成立が説明される。「同一の歴史が、ハビトウスと構造(＝制度)に客体化されているがゆえに、又その場合にだけ、ハビトウスの生みだす実践は、相互に理解可能なものとなり、構造に直接調整され、相互に協奏したものとなり、…客観的意味を…もつことになる」。こうして実践感覚と客観的意味の一致によって「常識」が形成されることになる」(九二頁)。

ハビトウスと階級、個性

次いで、ハビトウスと「階級」との関連が問題とされる。生活条件の均質性から生ずる、「階級」や「集団」のハビトウスの均質性が、客観的にそれらのハビトウスを一致させる。その結果、同一の階級や集団の「実践は、どんな戦略的計算とも規範への意識的な準

拠によることなく、客観的に一致する。また、どんな直接的な相互行為がなくとも、ましてや目に見える協奏がなくともお互いに調整されるものとなる」(九三頁)。すなわち、階級は「構造」つまり「目に見えない客観的諸関係」の所産である。同じ階級に属するものどうしの「相互行為は、…行為者の性向をうみだす」(そしてこの相互行為は)…行為者にその相対的な地位を割りあてる客観的な構造に負っている」(九三頁)。こうして同じ階級の成員は、協議したわけでもないのに、同一ないし類似の行為をするようになる。だから、集団の動員が成功するには、「動員をかける行為者(預言者、リーダーなど)のハビトゥス」とその対象者の「性向との間に最小限の一致がなければ」ならないのである(九四頁)。

「(即自的) 社会階級〔日本語的な意味での「階級」〕とは、…共通な…ハビトゥスを備えた、生物的個体の不可分な一集合」(九五頁)である。

その結果、この「階級」Ⅱ「集合」のメンバーは同じ経験をする確率が高くなる。つまり、ある階級が「財とサービスと権力に至るルートへの確率」が同じになるのだ。さらにここから、階級の閉鎖性が生ずる。「ある階級にとつて『閉ざされた』職業があり、手の届かない『地位』があり、『視界のきかない地平』があるのだ(九六頁)。

さらに、階級のハビトゥスと個人のハビトゥスとの関連が問題にされる。個人のハビトゥスは「階級と軌道における位置の特殊性」から生ずる「構造的ヴァリアント(変異)」にはかならない(九六―九七頁)。この「軌道」における変異とは、同じ階級の中で「上昇」、「下降」、「現状維持」なのかの違いのことである。また、この個人のハビトゥスの違いは、共通の「スタイルからの偏差」にすぎない。

すなわち、ハビトゥス生産の社会的条件の「同質性」、「相同性」〔構造的類似性〕によって階級的同質

性が確保されているが、同時に「地位」の違いによるこの「同質性」からの「偏差」による多様性があるのだ。

また、ハビトウスはその一貫性を保持しようとする保守的傾向をもっているがゆえに、ハビトウスを危険にさらしかねない「情報」を避ける「回避戦略」を駆使する。その結果、階級のハビトウスはその「同質性」を保持することになる。

目的論の幻想、合理的行為論の批判

さらに、ブルデューは行為の目的論的解釈や相互行為論の問題点を、ハビトウス概念によって批判する。実践は目的 \parallel きたるべき未来 \parallel によって規定されているかに見えるが、本当はハビトウス \parallel 過去 \parallel によって規定されている。ブルデューは、ポトラッチ（註4）の例を引きながら「相互行為論」、特に行為の目的論的解釈を批判する。ハビトウスを共有する二人の行為者が

想定され、「贈与」 \downarrow 「お返し」 \downarrow 「競り上げ」のやり取りが例としてあげられている。この場合、最後の「競り上げ」、つまり贈られた物よりいい物を贈る義務が生ずると、果たしてこの相互行為が何らかの目的の追求であったのが疑問になってくる。こうしたポトラッチの相互行為を「目的論的に叙述すること」が「ナイーブ（バカ正直、愚か、間抜け）……なこと」であることがわかる。すなわち、予測される結果が目的であるなら、こんな「競り上げ」を目的にするのはバカげた話だからである。

つまり、目的は予測される未来によって規定されているのではないのだ。それとは反対に、目的は過去 \parallel ハビトウス \parallel によって規定されている。このことが分かるのは、「場違いな振る舞い」や「時代遅れの行動」（ドン・キホーテ）をする場合である。目的が、未来を「合理的に計算」して立てられているなら、こんな勘違いは起こらないであろう。成功した過去の経験 \parallel

ハビトウスが、そのまま現在に適用されたからこうした失態が演じられるのだ。

さらに、ウエーバーの「合理的行為論」が批判される。つまり、ウエーバーの合理的行為論は、行為者がすべての状況とすべての行為者の意図を知り尽くしている場合にだけ成立するのであって、それは学者の知がつくり出したものにすぎない。

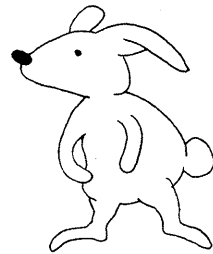
つまり、「客観的に妥当な」ものに従って『賢明に』方向づけられた合理的行為というものは、『あらゆる状況と個々人の意図のすべてを行為者が認識していたら起こるであろう行為ということになる』学者だけが、原因の完全な認識によって達成される行為が調整せざるをえない客観的チャンスを計算によって構築できる——とウエーバーが言うとき、合理的行為の純粹モデルというのは、実践の人間学的記述だとは考えられないことを明白に示している」（一〇二頁）。ウエーバーの合理的行為のモデルは、実際の行為＝実践を説

明しえないというのである。ブルデューのハビトウス概念こそが、リアルな行為論を可能にするというのである。

つまり、「実践は、計

算上にしか存在しない抽象的な、非現実的な概念にすぎない利害の平均的チャンスなどに依存しているわけではなく、個々の行為者の階級が所有している固有のチャンスに依存している」のであり、そのチャンスをものにしようか否かは「自己の資本に相関しているのである」（一〇二頁）。

最後に、あらゆることが可能というのは、主観主義の行為論が語るおとぎ話であり、可能なことは「能力」との関係で規定されることが主張される。行為者にとつての未来の意味は、可能なものと不可能なものとの関係によって規定される。ハビトウスが「能力」



の問題であることがトマス・アクイナスを引きながら明らかにされる。主観主義や「社会学の行為論」が、抽象的、空想的に設定するような、いかなる「階級」にも「家族」にも属さない、いかなる具体的「能力」にかかわらない行為主体が「客観的チャンス」に遭遇することで実践が成立するわけではない。主体の問題も自由の問題も、具体的な「能力」の問題として解明されねばならないのである。

(上越教育大学)

註

- 1 ピエール・ブルデュー『構造と実践』(石崎晴己訳、新評論、一九八八年、二四頁)。
- 2 同上、二〇頁。
- 3 「私がやったのは、社会を構造的に記述しようと試みたことです。つまり相互作用でなく客観的な関係をとらえる

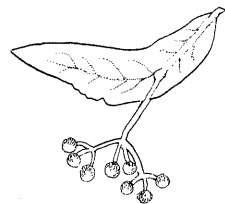
こと、直接的な相互作用に還元できない、目に見えない客観的な諸関係をとらえることです。お互いに会ったこともない人間どうしでも、ある構造のなかで結ばれていることがある、ということ。たとえば経営者と労働者は一度も会ったことがなくとも、客観的な関係に置かれており、彼等の行動を理解するには、その客観的構造を知らなければならぬということ。すなわち「(傍点)安田」。(ピエール・ブルデュー『ピエール・ブルデュー―超領域の人間学―』加藤晴久編、藤原書店、一九九〇年、三〇―三二頁)。

- 4 ポトラッチとは、北西部アメリカ(アラスカ海岸)のインディアンが行っていた面子を賭けた贈答交換合戦のことである。「贈答」への「お返し」の割増率は、年率三〇―一〇〇パーセントにおよんだという。(M・モース『社会学と人類学』弘文堂、一九八二年、二八七―三二八頁)。

外遊びの楽しみ

— 幼いきょうだいと暮らす —

藤津 麻里



私たちの住んでいる会津若松では、冬は寒く、雪

が多く、日も短くて、小さな子どもが外で遊ぶのは向きません。五月に入って、暖かく、日も長くなってくると、アパートの駐車場や砂場で毎日おそくまで遊ぶ子どもたちの姿が見られるようになりました。二棟しかないアパートで、合計二十四世帯だけなのに、こんなに子どもがたくさんいたのかと

びつくりするくらい……。

自転車で走り回る小学生の男の子たち。女の子たちはボール遊びをしたり、ブランコに乗ったりしています。それでも、高学年になると室内での遊びが中心になってしまうのか、大きい子はいつの間にか姿を消してしまい、ずっと外で遊び続けているのはたいてい幼児と一年生だけです。

小さな子どもたちは三輪車やおもちゃの車に乗ったり、砂場で熱心に遊びます。シャベルで砂をすくってバケツやお椀に詰め、砂の上にそっとひっくりかえしてケーキ作り。泥団子を丸める子。大きな砂山を作る子。二歳のTくんは靴をぬいで、はだしのしし歩き回っています。落ちていたシャベルを三本拾い、「あなたの使っていたシャベルはどれですか？」と、昔話の「三本の斧」の仙女みたいにユーモアたっぷりに聞いて回っている一年生のKくんは、ばらばらに遊んでいる子どもたちをゆるやかにつなぐメディーエーターといったところ。私もこんな楽しい集団にもっと早く参加していたかったな、と思いました。昨年は、生まれたての次男の世話で手一杯で、長男の外遊びの相手はほとんど夫に任せていたものだから……。

三歳になった長男は、「お外で遊ぶ！ 三輪車に乗る！」と宣言しては、この間まで自分ではけな

かった靴をサツとはいて、ドアの鍵を開けて飛び出して行ってしまいます。「待っててー」と声をかけても、「二人で行ってるから！」。どうしても出てほしくない時は、ドアにチェーンをかけておかなくてはなりません。この春に、それまで通っていた小さなベビーホームから幼稚園に移り、大勢の友達と園庭で遊ぶようになったことも影響しているのか、以前よりも活動的になったようです。でも、まだ車に対する注意力はもう一つなので、一人で外に出すのは不安です。道路に出してしまうのが危ないのはもちろんですが、子どもたちが遊ぶスペースの半分はアパートの駐車場になっていて、住人の車の出入りがあるからです。

ある日、やはり「外で遊ぶ！」という長男に、夕食の用意をすませたかった私は「外へ出る時のお約束。道に出ないこと。車が入ってきたら、逃げることで。できる？」と言いきかせることにしました。

「うん」とうなずいて出ていった長男が三輪車に乗ったり、砂場で遊んでいるのを時々窓から確かめながら夕食の仕度をし、次男と二人で追いかけて外へ出ます。たいてい、外では他にも何人か子どもが遊んでいて、つきそいのお母さん方も二、三人いることが多いので、全く大人の目がないわけではないのですが、勝手に頼りにしてしまうのも考えものですね。

長男の一番の遊び相手は、同い年のM子ちゃん。砂遊びが大好きで、毎日お母さんと一緒に砂場で砂をすくって遊んでいます。長男も仲間入りして砂場で遊んだり、三輪車で競争したり。最近まで三輪車のペダルを踏まず、お母さんに押して動かしてもらっていたM子ちゃんなのに、今では自分でどんどんペダルをこぎ、小さな坂もスーイと降りていってしまう上達ぶり。長男もぐいぐいペダルを踏んで追いかけます。母親としては、よそのお子さんの成長

を見るのも外遊びの楽しみの一つです。このごろは、逆にうちの長男の方が、砂利に車輪をとられて、M子ちゃんのお母さんに「押して！」と三輪車を押ししていたりしています。

少し年上の女の子たちも、長男をかまって遊んでくれます。五、六歳の男の子たちは、かつこいい自転車や車に乗っていたり、スコップで大きな穴を砂場に掘ったり、虫をつかまえたりしていて、長男にとって刺激的な存在のようです。先日も、砂場の砂のなかに珍しい虫を見つけたWくんが「何だこれ、もぐら虫かなー?」「モグラムシー?」と長男ものぞきこみます。砂をかきわけると小さな手があり、足はバツタに似ていて、蜂のような羽をもつ虫でした。虫を容器に入れて砂をかけてみる男の子たち。気がつくのと、長男もその虫を指先でむんずとつまんでいるではありませんか。バタバタ暴れる虫を見かねた私が「かわいそうだから離してやりな」と声を

かけてみましたが、なかなか離しません。後で夫に話したら「オケラじゃないか?」と言っています。こんど、昆虫図鑑を買って調べてみようかと思っています。

次男も一歳を迎え、屋外で靴をはいて歩き始めました。「もう少し、家の中で歩く練習をさせてから外に行かせよう」なんて、私はのんびり構えていたのですが、夫が靴をはかせて散歩に連れ出したらとても喜んだそうで、それをきっかけに毎日のように外へ連れていき、歩く時間を作るようになりました。

本人は外に出るのがとても好きらしく、玄関で自分の靴を指さし、「外に行きたいの?」と片方はかせると、もう片方の靴も指さして、はかせてほしいと要求します。外で立たせるとうれしそうにニッコリ。トコトコ歩き始めます。

夫と初めて散歩した日、次男は石や砂にそうっと手を伸ばしては父の表情を確かめ、「バッチイよ、

ダメ」といわれると手をひっこめていたそうです。

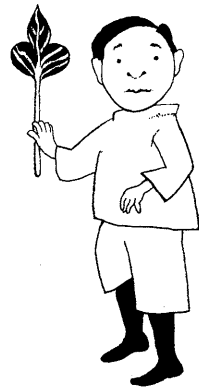
その後、外歩きを重ねる中で少しずつ大胆になり、いろいろな小さな発見や冒険をしています。地面に映る自分の影が面白くて、そちらの方向に歩いてみる。石や小さな木ぎれを拾いあげて眺め、口に入れてなめてみる。マンホールに開いている小さな穴に指をつっこむ。砂をつかみ、私に「ダメ、ポイしなさい」と言われてバツと投げ、また砂をつかんで口に入れてみる（あわててハンカチで口をぬぐってやります）。傾斜のあるところを、私と手をつないで登ったり下りたり。ちょっとした段差も踏み越えてしまします。草がかたまつて生えている株がとても気になるようで、手でまず葉をさわってみて、そろそろ右足を出し、株を踏んづけて感触を確かめていきます。

この子は一歳になるのを境に、急に言葉もはつきり出始め、「バイバイ」と手を握ったり、食後に皿

を片づけるなど、その場に合った行動をみせるようになってきました。兄と「ギャーツ」と大声を出し合ってふざけあう様子や、夜、なかなか寝つけずふとんの上であちこちへゴロゴロ転がっているのを見ていても、もう赤ちゃんではなく、一人前の「子ども」らしくなってきたのを感じます。顔や体つきはまだばちゃばちゃと柔らかく、赤ちゃんぽさが残っているのですけれど。トコトコ歩きながら、もっと広い世界に出ていく時期なのでしょう。

少し残念なのは、次男のトコトコ歩きにつきあっている、長男が遊んでいるのをよく見られないことです。長男のいる方をチラチラ見ながら、何をしているのかな、お友達と仲良く遊べているのかな、と気にはなっているのですが……。大きな泣き声があるかないところを見ると、今のところは大丈夫かな、と思ったりしています。

それでも、こんな遊び方も、それぞれの遊びに集



中でできているという点では良いのかもしれません。家の中で二人を遊ばせていると、お互いが使っているおもちゃが楽しそうに見えてとりあいになったり、長男が組み立てたレールやブロックを次男がさわって壊したただの、長男が次男の上のしかかっている危ないだの、としよっちゅう衝突が起こり、私はその仲裁に追われてしまいます。外遊びの時は、全く別々のことをしている分、衝突がなく、長男も同じ年頃のお友達とダイナミックに遊べます。兄弟で本格的に同じ遊びができるのはもう少し先になりそうです。今年はこのままに、それぞれが自分のペースでやりたいことをしているのを、眺めて楽しむこと

にしましょう。

アパートの庭に、木製の丸いベンチがあります。

直径三、四メートル、幅五十センチメートルくらいのドーナツ型です。子どもなら十五人くらいは座れそうなのですが、子どもたちは座るよりも、ベンチの上をぐるぐる歩いて回るのが大好き。大勢で列になって歩くのを見ていたら、年齢によってはつきりと特徴があるのに気づきました。まだできないので、母親の私に抱えられて見ている一歳の次男。二歳のTくんやR子ちゃんは、歩いて回ることはできませんけれど、他のものに気をとられてよそ見をしているうちに、足を踏み外してベンチから落ちこちてしまいます。みんなが歩いているのと反対方向に歩くとうとすることもあるため、お母さん方は、ベンチから落ちて大泣きしているのを抱きあげたり、「こっち回りだよー、反対回りはダメよー」と交通整理し

たりと大忙し。三歳の長男やM子ちゃんは、前の子の様子を見て、前が止まれば自分もしっかり止まって待っています。そんな三歳児の後ろで、一年生のK子ちゃんはじれったそうに「早く行ってよお」とせかしたり、ベンチから飛びおりて列の前方へ移動したりしています。同じく一年生のKくんが、長男に「R子ちゃんを追いこして前に行くんだよ。ベンチから一回降りて」と教えてくれましたが、長男はまだ分からないようでした。

いろいろな年齢の子どもたちが時間と空間を共有して遊ぶこと、その中に楽しさのタネが沢山隠れているような気がします。ベンチの上でぐるぐる回ってはしゃぐ子どもたちを見ながら、ほんとうにそれぞれマイペースで面白いなあ、と、ほのほのと愉快な気持ちになったひとときでした。

(会津若松市在住)

編 集 後 記

今月の特集はへとまる・とどまるです。四人の方に関心をお持ちの視点から書いていただきました。

*

ちようど、とどまるについて考えていたころ、若い人たちと読んでいた本の中で、歩きまわる子ども“の話しに出会いました(津守真著『子どもの世界をどうみるか』NHKブックス)。

S子は、砂場にいる子、水で遊んでいる子などのところに立ち寄っては、じきに立ち去ってしまいます。その様子に「この子は、いつも落ち着きがないんです」と母親。しかし津守氏は、S子をよく見ていると

そこにいる人に視線を少しとどめてから次に移っていることに気づき、氏自身の体験に想像を巡らせます。

パーティーのとき人々の間をうろうろと歩きまわる。だれかと話さぬれば、それで歩きまわる行動は終わる。だれかと関心をわかち合い、存在感をともにすれば、そこに「とどまる」と。

そして、S子に「落ち着きがない」のではなく、だれもがこの日のS子と親密な関係に入っていない。自分も含めて、と気づきます。

これを読んで、この言葉の肯定的な面―だれかと親密な関係に入ることでその場に「とどまる」ことができる―に気づきました。「とどまる」という言葉は、先に進まない、という否定的な意味ばかりとは限らないようです。

(A)

幼 児 の 教 育

第一〇一卷 第十一号

(二〇〇二年十一月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十四年十一月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―六六一三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ!

編集委員 森上史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎正行 (東京家政大学教授)
柏女靈峰 (淑徳大学教授)

最新刊



21世紀保育ブックス⑪

保護者の要望をどう受けとめるか 苦情解決・第三者評価に求められる保護者への説明責任

小笠原文孝 よいこのもり第2保育園

延長保育、休日保育、夜間保育など、子育て支援として園が果たしている機能は、依存性の強い親にしていくことと、決して同義語ではないのです。「子育て支援」とか、「共に育児を考える」ことの根底には、園側の説明責任と応答責任、そして行動責任をもつことがあります。そして親自身が社会的自己責任を獲得して、それを双方が認め合う上に成り立つものだと言えます。園と保護者とが共に育ち、支え合う方法を探ります。

B 6判 168頁 定価：本体1,200円＋税



21世紀保育ブックス⑫

保育所と幼稚園～統合の試みを探る

吉田正幸 幼児教育21研究会

保育所と幼稚園は、同じような年齢の子どもを教育・保育する施設であることから、かなり以前から一元化が言われてきました。福祉的な要素の強い保育所であっても、教育的な要素の強い幼稚園であっても、子育て支援の機能をどう持つかという点では共通しています。言い換えると、子育て支援という枠組みにおいて、保育所と幼稚園の垣根はほとんどありません。つまり、より大きな意味があるのは、保育所や幼稚園の施設ではなく、そこで発揮される機能なのです。すなわち、保育の理念に行き着きます。本書では、これまでの一元化の試みと、これからの多元化・統合への道を探ります。

B 6判 208頁 定価：本体1,200円＋税

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|------------------|---------------------|
| ①新しい教育要綱・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女靈峰・山本真実 共著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・土堀内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 | ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |

<以下続刊>

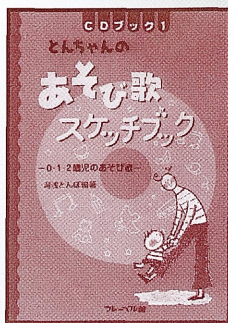
キンダーブックの
フレーベル館

CDと解説書がセットになったあそび歌の決定版。
楽器から解放されて、子どもたちと思う存分「あそび歌」で
遊びたいという保育者の皆さんに贈ります。

CDブック① とんちゃんのアソビ歌スケッチブック

—0・1・2歳児のアソビ歌—

最新刊



湯浅とんぼ／編著
B5判 48頁+CD枚
定価：本体2,500円+税

CDブック② わんちゃんのアソビ歌パラダイス

—3・4・5歳児のアソビ歌—

最新刊



犬飼聖二／編著
B5判 48頁+CD枚
定価：本体2,500円+税



子どもとあそび歌を楽しむのに、ピアノ伴奏はあまりふさわしくありません。なぜなら、ピアノに向かっては、子どもの動きが見えないだけでなく、子どもたちと一体になって遊ぶことができないからです。

①巻は、著者が乳幼児のために曲を作り、実際に歌って楽しんだ15曲を収録しています。

②巻は、著者が全国各地の遊びの講習会で、子どもたちといっしょに歌い踊った作品を中心に15曲収録しました。いずれも、実際の保育現場で長く歌い遊ばれてきた曲ばかりです。

解説書に、楽しいイラストで遊び方を分かりやすく紹介したので参考にしてください。

キダーブックの
フレール館